

囲碁の言葉 その2 【白黒】

大和田囲碁同好会 成田 滋

前回、八王子囲碁連盟(八碁連)の前身は、「八王子の碁を楽しむ老人連合」(碁老連)であることを申し上げました。碁老連ニュース第1号は、ガリを切り謄写版で刷っていたのです。ガリを切りは、結構職人がたきのような技能を要します。力を入れすぎると油紙が切れたりするのです。特に線を引くときは注意がいります。印刷ではインキのつけ具合が大事です。謄写版では手が汚れたことと察します。碁老連を形成していた当時の寿同好会の会員は有段者で、163名の会員数となっています。初心者や級位者は入会できなかったようです。ちなみに2022年度の八碁連の会員数は285名です。

碁老連の運営は、8つの寿同好会からの「上納金」や「寄付金」を充てるとあります。上納金とは面白い表現です。活動はもっぱら同好会の対抗囲碁大会、名人・王座・天狗戦大会の開催が中心だったようです。当時、初心者の育成とか子どもへの囲碁の啓蒙や普及活動などは視野に入っていなかったようです。

----- 【白黒】 -----

碁石の大きさは、黒石が直径22.2ミリ、白石は21.8ミリです。白色は膨張して見えるので、同じ大きさで作ると白い碁石のほうが大きく見えてしまいます。見た目と同じ大きさを感じるよう、若干白石を小さくしているのです。対局のために、碁笥には黒石の数は181個、白石は180個が用意されます。



物事には白と黒、表と裏、陰と陽があります。物事の是非・真偽・善悪などを決めるのが「白黒をつける」です。その語源は、囲碁の碁石から由来します。物事をはっきりさせることです。人間の心理とし、「負ける・弱い」ことよりも「勝つ・強い」ことを前提にしがちです。ですから「黒白をつける」とはいいません。白星、黒星はそういうことです。

2023年2月1日